

「宗教間対話運動と日本のイスラーム理解」

講演原稿：宗教政治フォーラム（宗教政治フォーラム実行委員会主催）

2021年2月4日、市ヶ谷私学会館

筑波大学名誉教授、博士（文学）塩尻和子

1. 問題提起

イスラームフォビア（イスラーム嫌い）

日本ではイスラーム世界との歴史的つながりが薄いために、イスラームは理解しにくい宗教だと思われることが多く、イスラームに関する客観的な知識を持つことは難しいと考えられている。イスラームが日本だけでなく、外側の世界から偏見と誤解をもたずに眺められるということは、この宗教が西暦六一〇年に始まって以来、ほとんどなかったからである⁽¹⁾。

今日まで執拗に繰り返されてきたキリスト教世界からの非難中傷にもかかわらず、イスラームは世界に広がりつづけた。歴史的事実からみても、一九二二年のオスマン帝国の滅亡時まで、イスラームはある意味で世界の中心に位置していた。イスラームの外側では、あたかもイスラームが劣等な宗教として後進性や貧困、政治的混乱などと同義語のように語られるが⁽²⁾、イスラームの内側では、イスラームの教えと戒律のもとで多くの人々が穏やかに暮らしてきた。イスラームの急激な世界伝播は、この宗教が基本的な教義さえ遵守すれば、各地の伝統文化や慣習などの多くを柔軟に取り入れ土着化を図ったからでもある。

この柔軟な対応の特例はイスラーム文明の発展にもよく表れている。イスラーム世界は七世紀から一六・七世紀にいたるまでの長い期間、周辺諸国の伝統や技術を柔軟に取り入れて、近代科学につながる輝かしい文明を発展させ、今日の科学技術の礎を作ってきた⁽³⁾。この地域の後進性や貧困、政治的混乱が問題視されるようになったのは、オスマン帝国の滅亡以降のことである。

そもそも今日、日本に伝えられるイスラームに関する情報の多くは、欧米のメディアを通してもたらされるものであり、イスラームとイスラーム教徒、ムスリムに対する偏見や蔑視、無理解などを含んでいることが少なくない。このような欧米からの情報によって増幅されたイスラームフォビア（イスラーム嫌い）は日本人にも大きな影響を与えている。

たとえば、一九九一年一月に始まった湾岸戦争の際に、海岸に設置された石油タンクが破壊されて、大量の重油がペルシア湾に流れ出たことがあった。この重油にまみれて真っ黒になった水鳥の写真が世界各地の新聞に大きく掲載されて、イラク軍の無謀ぶりが喧伝された。当時、イラクのサッダーム・フサイン大統領に対して、異常なほど残虐な政治家であるという認識が世界中に行き渡っていたので、この水鳥の写真は反イラク感情を定着させるには極めて効果的であった。

これについて、当時の朝日新聞の「天声人語」には「イスラームには自然を保護する意図はないので、重油を海に流しても平気なのだ」という意味の文章が掲載され、イスラームの思想は人間中心なので人間が勝手に自然を破壊しても問題はないのだといった批判の筆陣をはっていたことを思い出す。しかし、湾岸戦争が終わって、この重油流出は実際にはアメリカ軍が撃ったミサイルが原因だったことが明らかとなり、この報道が間違っていたことがわかったのちも、朝日新聞が訂正記事を掲載したとは私の記憶にはない。

最近では、二〇一五年一月にフランスの週刊誌シャルリー・エブド社で起きたテロ事件はイスラームの犯人たちによって記者ら一二人が殺害されるという悲惨な結果となった。この事件は「イスラームはあらゆる偶像作成を禁止している」ことが原因であり、「表現の自由」は、いつ、いかなる場合であっても守られなければならない金科玉条であるとして、イスラーム批判が広がった。シャルリー・エブド社の過去の誌面には、他の宗教の指導者や政治家などの風刺画も見られるが、預言者ムハンマドを描いたものは、誰よりも不道徳で醜悪な姿に描かれていた。民衆の不満を風刺画に託す伝統を持つフランスであっても、特定の人物を批判するために描かれる風刺画は、少なくとも人間としての尊厳が守られたものであってしかるべきであろう。テロは決して許されるものではないが、多くの信徒から篤く尊敬される預言者が性的に不潔で不道徳的な姿に描かれることは、ムスリムでなくても目を背けたくなる。

そもそもイスラームは肖像画の作成を禁止していない。禁止されているのは、絵画や像を「崇拝する」こと、つまり偶像崇拝であり、イスラームの教えの原点であるクルアーン（コーラン）には、どこにも「絵を描いたり像を作成したりしてはならない」とは記載されていない。イスラーム世界ではモスクやマドラサ（高等宗教教育機関）などの宗教的施設では絵画も像も用いられないが、王宮や個人の住宅などでは絵画や肖像画が飾られ、歴史書などにはムハンマドの顔や姿も描かれてきたのである。

2、キリスト教を受け継ぐイスラーム

人口統計学者のエマニュエル・トッドはイスラームフォビアがイスラーム教徒の若者を過激派の戦士として送り出す要因となっているとその危険性に言及している。

理解すべきは、仮に一部の若者が「意味」に飢え、「宗教的なもの」に飢えているとすればイスラーム教を罪あるものとして標的にするのは、その若者たちにイスラーム教を現実からの理想的な脱出口のように見せるだけだ、ということである（『シャルリとは誰か？』堀茂樹訳、文春新書、二〇一六年、二八二頁）

しかも、フランスの内務大臣の発言によれば、イスラーム過激派を志願する若者のうちの二〇％はキリスト教徒出身者である（前掲書二四六頁）という。「自由と平等」があるはずのヨーロッパでキリスト教徒の若者まで「意味」に飢えているということは、何を表しているのだろうか。

クルアーンでは、イスラームがユダヤ教、キリスト教の伝統を受け継いで建てられていることが明示されている。イスラームの支配下では、ユダヤ教徒もキリスト教徒も共に「啓典の民」として保護の対象となり、保護民（ズィンミー）として一定の税金を納めれば信教、職業選択、移動などの自由が与えられた。その制度が最も機能的に運用されていたのは、一二九九年から一九二二年まで続いたオスマン帝国の時代であった⁽⁴⁾。イスラームでは最も聖なる聖典は神の言葉クルアーンであるが、同時にモーセの律法（トーラー）、ダビデの詩篇、イエスの福音書も聖典に指定されている⁽⁵⁾。

そのために現在のヨーロッパの若者がイスラームに親近感を抱いたとしても、何も不思議なことではない。たとえ彼らが、イスラームがユダヤ教とキリスト教の伝統上に成立した宗教であり、これらの3宗教には相互に関連しあう教義やよく似た戒律が存在することによって、過去にも共存が可能であったということを知らなくても、古い常識に左右されない若者たちには、イスラームの存在を知るだけでも、新たなアイデンティティの発見となるのかもしれない。

他方、日本人は一般に、ユダヤ教についてはあまり関心を持たないが、イースターやクリスマスなどの行事を通じて、あるいは、教会での結婚式の影響やキリスト教系の学校を卒業した人も多いことなどから、キリスト教については親近感を感じることは珍しいことではなく、西洋の学術や文化はある意味であこがれをもって親しまれている。しかし、キリスト教とほとんど同じ教義をもつイスラームについては、後進的で野蛮な宗教であるという誤解から、イスラームを学ぼうとする人の数はかなり少ない。つまりキリスト教に対しては、何かしらの尊敬の気持ちをもって接するが、イスラームに対しては非人間的な宗教であるという蔑視、つまりイスラームフォビアが先に立ってしまうのが現状であろう。

そのような環境下で日本人のイスラーム理解を進めるためには、新しい視点から構成される、相互に効果的な対話の試みを実施されることが重要であるが、それは、たんにイスラームとはなにか、を知ることだけでなく、日本では多数派である仏教徒との効果的な対話も提案されるべきである。一部の仏教徒の中には、イスラームは、正しく理解したり学んだりすることが難しい宗教で、自分たちとは無関係で奇妙な宗教であると蔑視的に見る傾向があるからである。

しかし、それでもキリスト教を学ぶことは、実はイスラーム理解への近道の一つである。仏教家のなかにはキリスト教を学び聖書を愛読する人も少なくない。イスラームの教義はキリスト教から受け継いだものが多く、世界観や人間観、死生観など、人間が生きていく基本的な問題に関しては、実質的に同じ教えがみられるからである。高名な仏教学者で東洋大学学長を一年間も務めた竹村牧男は以下のように仏教とキリスト教を対比している。

キリスト教では、人間は罪を背負っていて、そこからいかに救われるかが大きな主題となっていますが、仏教の場合は、苦しみという現実があり、そこからいかにその境遇を打開していくかということが主題となっています。（『心とはなにか』春秋社、二〇一六年、三四頁）

イスラームにはキリスト教の「原罪」思想は見られないが、人間は本来、誘惑に負けやすい弱

い存在であるとされているので、この仏教との対比をイスラームに重ねてみることも可能であろう。イスラームでは、いかにして神が定めた倫理的秩序に従って正しい道を歩むことができるか、という点が主題となる。そこで、仏教でいわれる「生老病死」などの苦しみを打開した先に見えてくるものを、竹村は「悟りの智慧」と呼び、それは煩悩を完全に脱却した心が働くことであり、そこから「発菩提心」、つまり他者を救済する心が出てくるとする。(前掲書、九八頁)。

竹村はさらに、キリスト教において、自分が神に愛されていることに気づき、他者を愛することが自分の使命であると自覚させられて自己も救済されるのであれば、キリスト教も仏教も同様である、と述べている。隣人愛を実践していくことは、イスラームにおいても基本的な義務であり、神の慈悲のうちで他者も自己も救済されると教えられている。つまり、宗教的にみれば、世界宗教である仏教もキリスト教もイスラームも、いずれも同様の救済策を持っていると考えられる。

3、一神教と多神教は区別できるのか

風土説の弱点

日本でのイスラーム理解を進めるうえで避けて通れない問題がある。それは、一般に多神教的世界である日本で、ユダヤ教、キリスト教、イスラームのような一神教を理解したり評価したりすることは難しいという姿勢である。その理由として、我が国では、世界の宗教を語る際に、風土の影響を取り上げる人が多い。たとえば、全般的に乾燥地で砂漠がひろがる地域には、峻厳で絶対的な一神教が興り、温暖で降雨の多い地域には、多神教が興りやすい、と主張される。自然環境が厳しい中東の砂漠からはユダヤ教、キリスト教、イスラームという一神教が生じたが、アジアや日本のように自然に恵まれた緑豊かな地域では、あらゆるものに神性を求めて崇拝するアニミズム的な多神教が発生したという。

これに関連して、西洋的な一神教的世界観と、アジア、とくに日本的な多神教的世界観とを対比して、最近、後者のほうが平和的で自然保護の観念からみても優れている、という主張が強くなってきている。

このような「風土説」は一見、まともなような感じがするが、決して正しい見解ではない。世界宗教史を概観すれば、一神教か多神教かという区別を自然環境に起因するものと考えることには、根拠が乏しいからである。自然環境が峻厳な地域には一神教が発生しやすい、とすれば、インド亜大陸に多神崇拝のヒンドゥー教が発生したことについて明確な説明ができない。一神教が興ったとみられている中東の砂漠地域も、じつは多神教と偶像崇拝が蔓延した世界であった。その地にユダヤ教やキリスト教、イスラームという一連の一神教が発生したのちも、偶像崇拝が強固に分布していたことは、考古学的研究からも証明されている。

また、世界の歴史を概観してみただけでも、一神教はつねに他者に対して排他的で不寛容であり、多神教がつねに寛容で平和的であったとは、言い切れない。ローマ帝国の支配が多神教時代に寛容であり、一神教のキリスト教を国教として採用した後に、一転して厳格で不寛容となったとも言いえないであろう。歴史上のどの帝国であっても、支配者は排他的で不寛容であり、反乱

者に対しては極めて野蛮であったことは、容易に理解できることである。我が国でも、戦前の国家神道という政策が自国民に対しても対外政策においても、寛容で平和的であったとはいえない。

4、一神教には救いがいいのか？

一神教の教義では、超越的な存在としての神と、その下で神に絶対的に服従する「神の被造物」である人間という、この絶対的断絶をさまざまな工夫によって乗り越えようとしてきた。ユダヤ教では信徒を「神の選民」とし、「約束の地を与える」という囲い込みによって神との結びつきを図ろうとしてきた。キリスト教では、いうまでもなく、創唱者イエスを「救い主・神の子」として神と人間の仲保者とみなした。信徒は神の子イエスを通してのみ、天の父なる神の救いを得ることができる。イスラームでは、神は人間に神の言葉クルアーンを与えることによって、神の意志を地上に実現させようとした。

ある意味では、キリスト教の「神の言葉」（ロゴス・キリスト）としてのイエスは、イスラームでは「神の言葉」聖典クルアーンにあたる⁽⁶⁾。このような図式化は単純すぎるかもしれないが、唯一の絶対者に立ち向かう人間の側からみれば、これらの工夫は信徒にとっては精神的な救済装置となり、社会のなかで生きるための指針となる倫理規範でもある。

一神教の神についてのこのような工夫は、仏教の天地自然の法則「ダルマ」の考えと似ていないであろうか。「法」（ダルマ）は宗教的な解脱にいたる道へと人びとを導く正しい教え、あるいは「真理」を意味するといわれるが、これを一神教の神の導きや神の教えと同様に考えることはできないであろうか。仏教は世界中にさまざまなかたちで展開しているので、一概に「仏教では」と断言することはできないが、一般に仏教では、「神」のような恒久的な実体の存在を認めない反面、「法」には絶対的な価値があると考えられよう。

イスラーム学の碩学、鎌田繁は自身について「仏教徒である」と表明し、仏教学にも造詣が深いが、ダルマとイスラームの神との類似性を以下のように述べている。

自分を超えた力をもつ何らかの存在一般、という意味でのカミサマは、神的存在を総体として一つのものとして捉えていた場合、イスラームにおける神と非常に近いものになってくる。違うのは、それを唯一の創造神であると明確に認識しているか否かという点である。

仏教にはこれに類する考え方がある。例えば、^{ダルマ}法（真理）の集まり、あるいは法を身体とする存在のことを^{ほっしん}法身という。・・・真理そのものが身体であれば、それは時間や空間によって変わるものではない。（『イスラームの深層「遍在する神」とは何か』NHK 出版、二〇一五年、一三一頁）

この絶対的真理「ダルマ」に覚醒した人間が「仏」となる、ということは、全身全霊で「法」に従う人が「仏」となることと同じことではないかと思われる。そうであれば、「魂の救済」という意味においては「神に従う者」と「法に従う者」は同じ次元にあるのではないか。神と人

間、法と人間、それぞれの間には大きな断絶があるが、「従う」あるいは「悟る」という行為によって、どちらの側の人間も救われるのではないであろうか。

ここで、一神教の「神」は、仏教では仏ではなく「法」と対比されるということに気づく。それでは「仏」は何に対比されるであろうか。仏は覚者か聖者にあたり、普通の人間には得ることのできない聖性を与えられた特別な存在であると考えられる。このような対比には批判もあるかもしれないが、聖書の記述にもあるような「人の子」というように、広い範囲で考えるなら、人間だれでもいったん救われるなら、なることができるという「仏」と対比され得よう。人間は、誰でもが真理に目覚めることによって、「人の子」にも「聖者」にも「仏」にもなる可能性がある。しかし、「真理に目覚める」ことは極めて難しいことであり、実際には誰にでもできることではない。

「真理に目覚める」ことが誰にでもできることではないために、イエスやブッダの存在が特別な聖性を体現したものとなる。キリスト教はイエスを三位一体説にしたがって「神の子」となし、救い主「イエス・キリスト」としているが、仏教、特に大乘仏教においては、ゴータマ・シッダルタは死後、ダルマを身にまとった「法身」であったとされ、仏教における最高仏、大日如来として崇拝される。大日如来は時間や空間に支配されず、生成消滅もしない不変で永遠の絶対者である。神を立てない宗教である仏教において、不変で永遠の絶対者を崇拝し、それに心身ともに従うことは、まさに一神教の神への信仰と変わりはない。

こうして、イスラームの神に従う者も仏教の法に目覚める者も、どちらの魂も信仰によって救済されると考えるなら、一神教の神が無慈悲で、仏教の仏こそが慈悲深い、と断言することはできない。「存在の苦しみ」はダルマのもとにある仏教徒にも平等に降りかかるからである。一神教の神の「愛」と仏教の「慈悲」との相違点については、さまざまな立場があると考えられるが、私は突き詰めて考えれば、どちらも同じく究極の理想であり、宗教を支える原動力ではないかと思う。そこでは、もはや一神教と多神教との相違も問題ではなくなるであろう。

5、一神教の中の多神教性

一神教と聖者崇拝

ユダヤ教、キリスト教、イスラームという三つの一神教は、その教義や宗教儀礼においても一貫して一神教的な性格を堅持しているであろうか。じつは、これらの中でも最も厳格な一神教であるイスラームにも、根強い民間信仰として聖者崇敬が存在する。聖者崇敬は、イスラーム世界各地でそれぞれの地域の独自性をもって広く根づいている民衆的信仰であり、これを正統的ではないとして否定的にとらえる指導者がいることも事実である⁽⁷⁾。

イスラームでは、人々の尊敬と信頼を集めた宗教指導者や神秘主義の導師がその死後、聖者と認められることが多いが、興味深いことに、聖者のリストには勇名を馳せた将軍と並んで誰もわからない漂着死体、生前に大泥棒であった人などまで幅広く含まれる。シーア派では歴代のイマーム（最高指導者）も聖者とされる。聖者は特別な覚者でなくとも、その死後、墓などに超自然的な霊力の発出が認められると、現世利益を求める民衆の崇敬を集めることになる。

人類史を通して、宗教の歴史は多神教の歴史でもあるが、その中で「一神教革命」とも呼ばれる困難な事業を遂行したのが、同一のセム的一神教の系譜につながるユダヤ教、キリスト教、イスラームである。預言者ムハンマドがイスラームを確立したことについて、アラビア半島の「一神教革命」であると主張する研究者もいるが、この厳格な一神教も、ムハンマドが生きているうちから多神教時代の多くの風俗習慣を取りこんで体制化されていくことになった。もちろん、イスラームの儀礼として採用された多神教の残滓は、イスラームのもとに新しい意味と儀礼を与えられており、以前の多神崇拝のままに取り込まれたものではない。しかし、そこに明らかに多神崇拝の要素が残っているのは、否めない事実である⁽⁸⁾。

キリスト教を例にあげれば、私たちがもともとキリスト教の祭りだと信じて疑わない世界的な行事、クリスマス、イースター、最近ではハロウィーンも含まれるかもしれないが、これらは、実はローマ、ケルト、北欧などの異教文化がキリスト教と習合したものである。聖者や聖遺物の存在を公式に認めるカトリックや正教の教会では、イエスの像よりも多く聖者の像やイコンが華々しく飾られている。世界各地でいまなお盛んに行なわれている聖者崇敬は、一神教・多神教の区別なく存在し続けているのである。

これらの現象を見ていくと、一神教と多神教を明確に区別することはできないのではないかと思われる。一神教を掲げるユダヤ教もキリスト教もイスラームも、多神教の伝統や風俗習慣を、このように安易に大量に儀礼に導入していることを考えると、これらの三つの一神教は歴史の過程の中で唯一の創造神との契約に基づいて、「一神教」を標榜しているに過ぎないと考えられることもできる。つまり、日本人が神社や寺院で神々や仏に向かって祈るとき、その祈りの対象は、一神教の信徒が祈る唯一神と異なるものではない。

前にも述べたが、一般にイスラームは日本人の宗教観からは遠い宗教だと考えられやすいが、イスラーム思想の中には、道徳や社会的倫理の観点のように、仏教や神道に近い多くの教えや教訓が見つかる。このように考えると、多神教である日本の伝統宗教と、一神教のイスラームは、ともに同様の宗教的真髄を表象しており、日本の伝統宗教とイスラームとの相互理解も共存も不可能ではないように思える。人間も含めた森羅万象がすべて神の被造物であると同時に、神の存在を証するものであるというクルアーンの教えと、神殿を宇宙の中心と位置づけ、自然界の営みに神性を見ようとする神道の教えとは、相互に矛盾しない。また、神を立てない宗教である仏教においても、不変で永遠の「仏」を崇拝し、それに全身で従うことは、まさに一神教の神への信仰と変わりはない。

魂の救済を求める人々にとって、「神あるいは神々あるいは仏との応答」の場が、宗教であることを考えると、日本に生きるイスラームにとって、日本の伝統思想を互いに理解しあうことを通じて宗教の新しい地平が開けてくるように感じられるのである。

6、他宗教を重んじていたイスラーム

一般に仏像を崇拝する仏教は、イスラームではもっとも嫌悪される「偶像崇拝」にあたり、多神教徒として排除される対象になると考えられてきた。しかし、イスラーム支配下では、初

期から他宗教には寛容な政策がとられていたことは歴史的に明らかにされている。特にアッバース朝期のイスラーム世界では、現実には多くのヒンドゥー教徒や仏教徒が商取引の関係上、インドや中国などから入り込み定住して暮らしていたことが知られている。またムスリムも遠征や商取引のために近隣諸地域へ赴くことが多かった。ヒンドゥー教徒や仏教徒、ゾロアスター教徒などは、文言上は「啓典の民」でもなく、異端の多神教徒であるが、実際には「啓典の民」と同様の扱いを受け、イスラーム支配下では定住や信教の自由も保障されていた。特にアッバース朝期のユダヤ教徒は、保護民としての扱いを享受し、イスラーム政府から財政的支援を受けて宗教アカデミーを運営しており、今日に続くラビ・ユダヤ教の伝統を築き上げていた⁽⁹⁾。

中世のイスラームと仏教との相互関係については、世界的にもまだほとんど研究されていないが、このような交流の存在については当時の数少ない文献からも読み取れる。イスラーム神学者たちは、インド仏教を「偶像崇拜の多神教」として批判するのではなく、「預言者の存在を認めないが、哲学的で理性主義的な宗教」として、むしろ評価を与えていたことが理解できるのである⁽¹⁰⁾。

ムスリムにとっては、ヘブライ語聖書から受け継いだ多くの預言者の存在を認めることは、基本的な信仰箇条「六信」（その存在を信じなければならぬ信仰箇条で、神、天使、啓典、預言者、来世、予定）のひとつでもある。また最後の最大の預言者であるムハンマドは人間としてもっとも尊敬される人物であり、信者の模範となっている。したがって神の啓示を預かる「預言者」の存在を認めるか認めないかという点に、ムスリムの学者たちがイスラームと仏教の最大の争点をおいたことは、十分に理解できる点でもあり、また興味ぶかい点である。

今日、イスラームはアジアの宗教と呼ぶことができるほど、アジア地域に信徒数が多いが、国民の九〇%近くがムスリムであるインドネシアやイスラームを国教としているマレーシアでも仏教とイスラームは共存している。

7、宗教間対話の可能性へ向けて

多元化とグローバル化した世界において、イスラームとはなにか、どのような意味をもつのか、どのような役割を果たすのか、どうすればムスリムとの平和的共存が可能となるのか。日本国内でも増えてきたムスリムとともに、これらのイスラームについての諸問題を、私たちは日本人として改めて考えることが必要である。今日、急激に変化する世界においては、それぞれの思想を、偏見を排して客観的に学ぶことは重要なことである。

宗教というものは、哲学や倫理思想も同様であるが、じつにさまざまな解釈ができる。イスラームに限ったことではないが、聖典や戒律は、時として非人間的な解釈をもたらすことがある。イスラームについても、どの解釈が正しい、あるいは正しくないと決めつけることはできない。しかし、宗教としてのイスラームは決して好戦的でも、非人間的な教えでもない。この私の考えは、優れたムスリムの学者たちも主張している立場であり、多くのムスリムの考えにも共通していると思われる。そうでなければ、情報や交流の技術が発達した現在、イスラーム

の信徒数が激増するという現象は説明がつかないことになる。ムスリムの若者が参加する過激派の問題は確かに深刻であるが、その背景には国際関係の根深い要因があり、短絡的に宗教教義の問題に帰することはできない。

私たちは一神教と多神教といった枠を作ってしまうことなく、人間としての共通性を基盤として、イスラーム世界と日本との対話を続けていきたい。お互いに良く話し合い、理解しあうことは、効果的な宗教間対話を実施し、グローバル化したこの世界に平和的な共存関係を築き上げるために、極めて重要なことである。

戦闘的なイスラーム集団によるテロの報道に接する日本人の多くが、イスラームに対する嫌悪感や拒絶意識を持ったとしても、それを単なる誤解だとして非難することは、難しい。中東地域におけるこのような破壊的な暴力行為は、一九四八年のイスラエルの成立に端を発し、二〇〇三年のアメリカを中心とした有志連合によるイラク戦争で拡大し過激化したものである。ムスリムの戦闘員たちは、自らの行為を正当化するためにイスラームの旗を掲げて大義名分を主張しているのである⁽¹¹⁾。

しかし、その背景にはイスラーム社会の外側から加えられた政治的圧力に起因する問題が横たわっている。一九二二年のオスマン帝国滅亡以降の世界で、中東イスラーム地域は欧米列強の植民地や委任統治領として宗主国からの支配下に置かれ、急速に過去の栄光を失った。それまで自由に行き来できた広大な領土は、西洋列強によって恣意的な国境線で分割されてしまい、人々の共同体も文化や伝統、言語まで徹底的に分断され、苛烈な搾取や抑圧を受けるようになった。その屈辱と苦悩の歴史は、各地で領域国家として独立を達成したのちも、いまだに何ら解決を見ないままのパレスチナ問題をはじめ、イラク、シリア、リビア、イエメンなどで内戦が次々と発生して、人々をますます苦しめている。こういった歴史的背景が今日の紛争を引き起こし、継続させていることを忘れてはいけない。イスラーム過激派への対応も、中東各地の内戦や紛争を解決するための道筋も、このような歴史的背景を考慮することから始められなければならない。

一般に主義主張とは無関係の人命が失われることが多いテロ事件は、世界中でどの宗教の信徒でも起こす可能性がある犯罪であり、イスラーム教徒だから起こすのだ、という短絡的な理解は、テロの解決には決してつながらない⁽¹²⁾。

繰り返しになるが、イスラームは日本人にとって最も遠い宗教であるといわれるが、実はイスラームの教えのなかには、日本古来の伝統的な道徳や社会的倫理と同様の教えが多くみられる。例えば長幼の序を守ること、隣人との相互扶助が義務として奨励されること、相手の宗教を問わず旅人に親切にすること、正直な商売を心掛けることなどの倫理規範は、古きよき時代の日本に息づいていた公共道徳を彷彿とさせる。

それだけでなく、イスラームの掲げる一神教と、日本の神道にみられる多神教や、仏像という偶像を崇拝する仏教は、その信仰形態において相容れないといわれるが、前述のように、実際には表現の方法が異なるだけで同じことを象徴していると思われる⁽¹³⁾。

私たちは、我が国で陥りがちな一神教と多神教といった枠を作ってしまうことなく、人間としての共通性を基盤として、イスラーム世界と日本との対話を続けていきたい。お互いに良く

話し合い、理解しあうことは、効果的な宗教間対話を実施し、グローバル化したこの世界に平和的な共存関係を築き上げるために、極めて重要なことである⁽¹⁴⁾。

日本ではイスラーム世界との歴史的つながりが薄いために、イスラームは理解しにくい宗教だと思われることが多く、イスラームに関する客観的な知識を持つことは難しいと考えられている。しかし、外国人労働者の受け入れが急速に進む日本では、国際的に不安定要因の増加が懸念される今日であるからこそ、一四〇〇年の歴史を背負い、今日の世界で一八~二〇億人もの信徒を擁する巨大宗教勢力に対する理解と対話が必要である。

イスラームをめぐる相互不信は、今日の世界の様々な課題の中で大きな問題をはらんでいる。一四〇〇年を超えるイスラームの豊かな歴史を客観的に学び、政治的混乱や内戦に疲弊する中東イスラーム地域の人々を思いやることは、実は日本に住む私たち自身の将来を思いやることにつながる。

最後に、神が私たち人間の命の尊さについて教えた言葉を記すことにする。

人を殺した者、地上で悪を働いたという理由もなく人を殺す者は、全人類を殺したのと同じである。人の生命を救う者は、全人類の生命を救ったのと同じである(と定めた)。そしてわが使徒たちは、かれらに明証を齎した。だが、なおかれらの多くは、その後も地上において、非道な行いをしている。

(クルアーン五章三二節)

註

(1) 預言者ムハンマドは自らが興した宗教がユダヤ教やキリスト教とは異なる新しい宗教であるとは考えていなかったが、先行する二宗教は歴史の過程で歪曲されてしまったので、イスラームは一神教の改革運動、あるいは復興運動として啓示されたと主張するようになり、アラビア半島に居住していたユダヤ教徒やキリスト教徒から対立し非難されるようになった。その後、十字軍運動を通じて、ヨーロッパには、イスラームはキリスト教の異端であり、ムハンマドは反キリストであると非難され、イスラームのほうもヨーロッパのキリスト教徒だけでなく、中東地域で兄弟宗教として共存していた東方教会のキリスト教徒にも不信感を抱くようになっていった。これらの経緯については拙著『イスラームを学ぼう』(秋山書店、二〇〇七年、二一四~二一九頁)を参照されたい。十字軍運動については『聖戦の歴史』(カレン・アームストロング著、塩尻和子、池田美佐子訳、柏書房、二〇〇一年)に詳しい。

(2) イスラームについて劣悪で野蛮な宗教であると断じる知識人は少なくないが、最も典型的な主張は、サミュエル・ハンチントンによるもので、「イスラームとの境界線上は血なまぐさいが、内側もそうである」と言い切っている。(Samuel Huntington, *The Clash of Civilization and the Remaking of World Order*, Touchstone by Simon & Schuster, 一九九七, 二五八頁.)。彼はイスラームと西洋とは古くからの敵同士という固定観念に陥っているが、しかし、これはハンチントンに限ったことではない。

(3) 現代の科学技術の基盤となったイスラーム文明については、『イスラーム文明とはなにか・・・現代科学技術の礎』(塩尻和子、明石書店、二〇二一年二月出版予定)を参照されたい。この著作について、わかりやすい要約「解説、イスラーム文明とは何か」(塩尻和子、アラブ調査室 <https://arabstudies.jp/>)がある。また以下の文献が参考になる。『地中海世界のイスラームヨーロッパとの出会い』(W. モンゴメリー・ワット著、三木亘訳、筑摩書房、二〇〇三年再版)、『失われた歴史—イスラームの科学・思想・芸術が近代文明を作った』(マイケル・ハミルトン・モーガン著、北沢方邦訳、平凡社、二〇一〇年)、『イスラーム技術の歴史』(アフマド・Y・アルハサン、ドナルド・R・ヒル著、多田・原・斎藤訳、平凡社、一九九九年)、

(4) オスマン帝国では、帝国支配の当初から啓典の民を保護するために「ミット」制度が設置され、同じ宗教を信奉する共同体に分けた区域「ミット」が設置された。オスマン帝国のミット制度がどの程度、効果的に運営されたのかについては議論があるが、ユダヤ教徒、キリスト教徒、ムスリムを「啓典の民」とする共存思想が、帝国が滅亡した一九二二年まで機能的に運用されてきたことは評価される。

(5) イスラームの基本的な教義は六信五行と呼ばれるが、六信とはその存在を信じなければならない事柄で、神、天使、聖典、預言者、来世、予定であり、預言者の存在を信じることは四番目に置かれている。クルアーンには最後の最大の預言者であるムハンマドを含めて、二五名の預言者の名前が記されているが、そのうちのヘブライ語聖書と共通の預言者が一九名である。イエスも特に尊敬すべき立派な預言者であったとされている。

(6) 例えば、18世紀の宗教改革思想家、アブドゥル・ワッハブは聖者崇敬を激しく批判し聖者廟やシーア派のイマーム廟なども破壊している。アフガニスタンのターリバーンも偶像崇拜を否定して、バーミアンの仏教遺跡まで破壊したことは私たちの記憶に新しい。

(7) シカゴ大学の高名な宗教学者であったW・C・スミスがキリスト教とイスラームを対比して次のようなチャートを作成したことはよく知られている。

クルアーン……イエス・キリスト

ハディース……聖書

ムハンマド……パウロ

イスラームの聖典クルアーンにイエス・キリストが対応するのは、どちらも「神の言葉」であり、クルアーンは一語一句紛れもない神の言葉を啓示されたままに書きとめたものであるとされる。いっぽうのイエスは、「ヨハネによる福音書」第1章1節にみられるように、キリスト教の創始者であると同時に「神のロゴス」として神の言葉が地上に顕現したものと考えられている。ハディースは預言者ムハンマドの言行録であり、いふなれば彼の生涯の記録である。創唱者の一生の記録としては、聖書、とくに新約聖書の最初の四福音書に対応する。最後の最大の預言者であるムハンマドはキリスト教ではパウロと対応される。ムハンマドがパウロと対比されるのは、それぞれの宗教を民族の枠を超えて普遍的な世界宗教へと拓く契機を作ったからである。両方の宗教とも、真の意味の創始者は「神」であると考えらるなら、スミスの対比は意義深い指摘である。

(8) 代表的な例として、キリスト教ではクリスマスはもともとローマの太陽神の祭りであった

といわれ、クリスマスツリーは北欧の常緑樹信仰の名残である。イスラームでも義務の巡礼の行程の中に多くのイスラーム以前の行事が取り込まれている。例えば、悪魔の柱に小石を投げつける行事は、アラビア半島に根づいていた悪魔祓いの行事を採用したものであるが、イスラームではアブラハムが神からの離反を囁く悪魔を小石を投げて追い払ったという故事に基づいていると説明されている。

(9) アッバース朝期のバグダードでは、イエシヴァとよばれるユダヤ学院が三校、イスラーム政府からの資金援助を受けて運営されており、膨大なバビロニア・タルムードの研究も行われ、後世のラビ・ユダヤ教の基礎となる高度なユダヤ哲学を展開させていた。拙著『イスラームを学ぼう』(一五二―一五四頁)、イエシヴァの活動や研究については『イスラームの人間観・世界観』(二五八―二六三頁)を参照されたい。

(10) イスラーム神学の仏教理解については、拙著『イスラームの人間観・世界観』(二九―二九九頁)を参照のこと。乏しい中世の資料から、イスラーム神学の仏教に対する立場を明らかにしようと試みた論文であるが、この研究にはサンスクリットを駆使するインド仏教の専門家とアラビア語の資料が読めるイスラーム神学思想の専門家との共同研究が必要である。一〇世紀から一二世紀に活躍したムスリムの神学者たちは、仏像崇敬をする仏教徒について、イスラームでは禁じられている「偶像崇拜」だとして非難することは決してなく、仏教を哲学的な鍛錬をする教義だとして、丁寧に説明をしていることは、今日の宗教間対話においても、参考となる立場である。

(11) イスラーム過激派の問題は、ジハードとの関連で説明されることが多い。「ジハード」は「奮闘努力」と訳されることが多いが、本来は戦闘を意味する用語ではなかったようである。ジハードには二つの意味があり、実際に戦闘を意味する小ジハードと、信仰上の修行を意味する大ジハードの二種であるが、戦闘を意味するジハードも「聖戦」ではなく、イスラーム法学上許された「正戦」である。今日、戦闘的過激派集団が自らの行為を正当化するために宗教の旗を掲げ、ジハードを宣言することは、本来の宗教教義やイスラーム法の規定から外れたものであり、彼らの行為を安易にイスラーム本来の教義に結び付けて宗教批判をすることは、不毛なイスラームフォビアにつながる。中田考はジハードについて「イスラーム法に従うならば、ジハードとは異教徒の攻撃からの自衛に限定される戦闘行為だからです」と説明している(『イスラーム、生と死と聖戦』集英社新書、二〇一五年、二八頁)。イスラーム過激派については、拙稿「ジハードとは何か―クルアーンの教義と過激派組織の論理」(『変革期イスラーム社会の宗教と紛争』塩尻和子編著、二〇一六年、明石書店、三七―六一頁)を参照されたい。

(12) 中田考によれば、宗教的修行を意味する「大ジハード」の思想が、当初から「弱い伝承」(ダイーフ)に組み込まれていたことは事実であるが、スーフィズム・イスラーム学の伝統の中で学問として確立されている以上、大ジハードの優位が間違いとはいえない。伝承学上の根拠が極めて弱いのは事実であるとされるが、今日のイスラーム社会では、安定した政治を維持する思想として、有効的に用いられている。

<https://www.ahlalhdeeth.com/vb/showthread.php?t=227141> (二〇二一年一月二二日確認)

(13) 日本における一神教と多神教の論争については、拙稿「宗教間対話運動と日本のイスラーム理解」(『宗教と対話 多文化共生社会の中で』小原克博・勝又悦子編、教文館、二〇一七年、一〇三―一三七頁)を参照されたい。また、町田宗鳳は「ダライラマと近代文明」(『宗教と現代がわかる本』平凡社、二〇〇八年、七八頁)で一神教批判を展開している。若手の仏教学者の中には「信者の信仰実態から遊離している「一神教」と「多神教」というカテゴリーはもはや不要になっているように思われる」という立場も見られる(藤井淳「一神教と多神教の概念再考」『春秋』春秋社、二〇一六年一二月、一―四頁)。

(14) 我が国随一のイラク研究者としても知られる酒井啓子は、『9・11後の現代史』(講談社現代新書、二〇一八年)で、多くのデータを駆使して、中東や南アジアのイスラーム地域でテロが急増するのは2003年以降のイラク戦争からであり、それ以前は発生件数が少なかったことを明らかにしている。